伊地知文庫
文庫20
17

伊地知氏書冊

文明十三年二月廿四日

賦何船連歌

世ぬ人は花の香しる若木かな　宗祇

袖にとふや梅か香をさそふらん　俊咲

鶯の行端雲月すゝ朝ほらけ　玄琉

野をたちまよひぬ山の端そなく　正任

冬も猶見えけれとさそふ初時雨　宗時

[seal]

[seal]

文庫20
17

いつくの夜の雲をはらふ嵐 宗作
河上の雲のとをくに月そいて 唯阿
水をたつねに舟下る也 宗碩
庭すすき芦への秋や更ぬらん 良性
露ハ侘しさ夜の暁 祇
きゝすめる声は松原の生明に 任
身めをとふらてすまつかき 昕

あすの鐘ハとをきこまうちよ 覚
なかくくてこれゆくさきとをえぬ 珎
捨ゝらんと思す身をもなきまて 碩
むかし忘れぬ友のうれしさ 作
旅のころ宿をもきや見ぬらん 安利
浅茅か原の雪の下萠 聡
出る入と野径の水もあはれて 阿
朝日しつかのほる山の月 性

枕もし棲鹿の宿こそすゝしく　祐
まとろこれるよかすみの夢　任
行くると思ひあらそれぬるくに　欽
又分られの袖ぬらしたつぬる　賀
人いりしさしてはすにのまちるらん　祇
逢ていかつき命さまおし　作
難なるぬ恋路とをあてまちもとや　晴
惜む名もたて　芳閑の不や　能存

年のいふなるともよしや我齢　祇
子の生前を想ふたらちね　任
すて忍めをかくる浮世の思ひなく　性
心は誰もなき山への雲　河
寿るさき桜いろくと思ひやり　珍
雨晴をみすれ鳥の一声　禅
影うつき入日雲は露光ひて　賀
法あるはたよまきかつらむ　欽

まねくときさえに絹さえ袖もと　宗親
あつしれ絹ともなうらめし　但
いつよりハ人の心ハかわる薄　光永
ようれ思ひし　君そかなしき　昕
風あきろう檜扇の山れ　秋の声　鵆
墨るハ霧雲　立猶もかゝい　利
限もな紀井と海との月涼し　任
いつくの妻子まつあらん　作

秋ある夕ハうしや　雪のうち　賀
まれともかまつん　世の中は道　欽
見るまでも佳人からの花のつぼ　孝
あらぬ心を　哀も　情きめ　親
晴るされ渡りそろてゆくる夜寒　琉
倚寒し　横雲山　鵆
影まも月そかゝらぬかの枕　利
独とふ秋の須磨の浦風　昕

かれきゆく梁の枯葉に虫啼て　胜
垣にかゝるあく転むあふれきて　任
かきりもつ程も人身をやりて出きん　飲
いつまてさのみそら紀をあくしまし　竹
ねる夜の寺ひる世にも枕して　観
暮れは夜の雲に待くし　李
山寺すむ老僧く宮北あともなし　裕
向人くと紀雪はれわたりひ詠　眄

さゆるよみ枕や夢を覚えて読　笑
古き会の国のさむしきと　裕
すむ月も君とあるめし影あるて　作
飛乃むかふよいつわるきん　飲
うたろうあふこと心の小萩ちる　裕
ふ行野くいあるそ乱る　眄
いつくみく老のわきまし樵の袖　親
たつる宿ふるもれあし　暮らる　笑

時雨村時雨や急くさらむ
庭りてきれぬる村雨の空
雲くゝる末の遠山さそふらく
浪も寄らぬ沖中の鴫
塩に入江の早門一通り
通ひきもくるし小舟棹さす道
遠き法をぞ尋ねのさつめらん
心を人はよそに見えて

禎　永　琢　住　作　詠　祝

住わすれきぬみちは訪ぬるの
月をつくづる夜のむかし雲
更行はまさや時雨ん秋の夜
まつ色うすき紅葉の錦葉は
谷水落くれ音も幽けく
言ふ岩の奥　深き道
行く心もくるし　苔衣
かくそ神代の昔をしのばん

幸　禎　詠　賀　住　晴　禎　作

晴るまもなきは涙の雨なれや　永

思ひねの夢にも雲もをさまらす　阿

あけのころもといふ卯の花　利

玉川や波に螢も影消えて　總

ますそてきとれ井手の中道　時

下常の契はいかになりつらん　欽

心細ての枕も思ひ寝を　笑

根しもとりなる人なかりけり　紀

秋なや思ひかくらん　欽

植をさし情忘れぬ昔の苑　任

草木もかれ色を見えけり　時

永日の影も野山にかたふきて　笑

衣もたつうすき袖にかゝれる　珎

舟留よ風を松浦の西の海　總

唐まても名て君か代を　孝

宗祇 十七
俊賢 十
直玩 七
正任 十
告晒 十
宗作 七
唯阿 五
宗歓 十一

安利 四
能孝 又
宗親 六
光永 三
良性 又

同し懐紙の添状
文明十三年在京之時於会前一折興行
中に此日之人々手跡の志しるの懐帋
宗祇自筆清書之成後之識之和歌之
冥加ゟ子孫我家之系図ニ相添可致
秘蔵者也仍如件
文明十三仲秋二十五日
彦三郎右衛門尉
俊賢 度

右祇王古蹟今　　の家に蔵すと云
牛山寺の古蹟を謄写せしをもてありけり
うつしぬ牛山の雌雄鉤寺ハ得月楼に収める
文化十年正月十五日　浙孫司直

天保十三年五月満口園史よりこひかりてみつから書写す
久文

永正十六年二月十九日於月村斎
兼純興行

かへる雁おりくハ花に岩木の雪
世ハミな春雲もさくらの色　兼純
朝あらしうちくもる日や霞むらん　宗長
山端ハとをくうつろふ月なから　通胤
志らまさのさやつる風ハ秋見えて　宗碩

芦辺を流るゝちりうかむ河瀬　文敬
雨ことふくすゝく月のかげまた　玄清
後夜の夢のおとは雲井路　政宗
心のそひはいつくたひかゝる空　周桂
立まよふきてたれ見るましの露も　宿敦
打ならふ語られ尽ぬ雪霜露　宗運
かけはいよいよふみ霞もさそめや　宗牧
誰が袖の名残を梅の匂ふらん　孝文

霞まもる野辺の遠近　宗格

右連歌一巡發句者逍遥院
實隆公筆者柴屋軒宗長也

賦山何連歌

あき霧も嵐を月の雲はきらふ　宗牧

日影まつよの露にかはそら　氏紘

志ろたへの袂の杉に露満て　貞和

鳴子のこゑや霧こむるらん　無着

かへるさをいそく袖の里は明て　高好

野をとをりゆく玉ほこのみち　貞治

まくしらぬ常盤木に猶露ちりて　堅昌

みなしたくほたるはひろふ　貞信
ほころひるはゑめる秋の風　行恵
山のえへ月は傳れぬく　住阿
うち出る音をさまし紀藍川　説安
あさゆく翁のさやきあるを　玄閑
籠ゆるて稲はいつかはた傳へし　厳知
あふれ木をまとも世してまさかも　宗梅
をのつらはたるを住をこそ小やき　賢雪

柴の戸きへやあなと君か門井　宗教
寝さめにふらふか渡もいはふあゆよ　氏弘
わられぬちとそちつきりをもせめ　亘能
君すまいらと紀もきらにかうゝめや　無為
心傳ふのうきよ傳ふはよ　貞和
いく夕たへて浅茅に孫らん　賢俊
入日比程のまつのきびしさ　言好
庭にうとうて遠山かくれ停立く　貞治

市人いつちかうき中くら哉　行恕
おもしろし跡うきらし婦る雪　住阿
まうくるそ　そのへ書き暮まけり　瑞雯
霞てそうらめつりし紅衣なきも　玄周
桃ひく梅の香よ匂ふさし哉　宗梅
あをほのやさくら中の聖を語らん　貞信
まうとはいろんも月りそらなし　貞鑑
秋風まさあくの夢をちきりかく　宗枚

いつこの露の如ことうまし　武言好
りまその花もさき姫しあらしまた　貞和
うきい猫のおひとつそなきも　住阿
氣するも任それ喜び里ありて　民弘
色もうきせぬ池の水草　宗牧
柳ちる花も霞やこほるらん　宗梅
人めうきつるこちれ宿くし　瑞慶
たつゆんも萱よりすき世ふあゆきに　玄周

月もなかりなに　ゆく雁ら鳴　兼知
雨すそかたのめし　秋のささりなる　高好
古のなかれ手すゑし　るくうき　堂昌
むしさく弱にかはりまぬ　緑ありて　宗牧
浦は頭波きよらにその　中見　氏弘
見えぬらく見てありしや　ふくん　住阿
さむき枕にのこる　うつみ火　貞和
あくるよもかすまぬとしき　友なれや　覚円

又いつとおもひ　うつろち　宗牧
白雪も高嶺の山は冴えつすよ　泥受
うらなき弱きも頭の志らまし　行恕
つりなくともろく　ひまなくとて　久経
ちらひし　ありと神は　わされし　貞治
ぬきき衣やつれのはなさむ中なるん　宗梅
おもまゆく有るにふくかりぬさと　兼知
すりさともみなの山色なるこのたそふこ　宗牧

こ葉末にきらに玉をこぼしけり　言好
海月やころもころ〳〵はきりん　貞治
雁なく雲まあかれすくまに　行應
月おもとゝものうて寐をといきめさそ　任何
たまゝゝちる萩のちれ音　宗牧
うつろかなさめ夢も何かもん　宗梅
うけゝぬけつひ枕のまくらし　貞和
面影のひまゝそえてこよの夜　言好

まさ風よきにみ穂のたく雲　氏弘
山いえをまちこやく煙のくの雲　宗牧
いことをまうけ其や立ら雁　貞治
春をさる古巣の鳥群くまを　年羽
花のわきぞ露をちすまこの　玄周
色〳〵も咲へとこめる霧の中　貞和
秋ちり秋の時しやいあくれ　説叟
ひとまもてそ家まよるく月おゝみ　宗梅

かりまくら袖のうらなみて 宗牧
風をとのこゑもすみなるやこの山嵐 言継
いさくる人ともなく夜ぞさき 住阿
うつし絵はあつめし手たゞかなしく 玄周
なをまよふ心や世をのつきまよふ 宗悦
かはる契やそのいましくまゆふらん 貞治
さまよへくらきつらさをもうらむなり 尚知
なくさむはうらのあき絹ほしき 住阿

をりをりかはるせの詞舟 澄安
影きよく限なき月の淡路潟 貞信
庭の萩あらゝうち時雨きそや 宗梅
いろかはる山の下染をそむる露に 氏弘
ひろうもひろし仮の世のをたのむ 賢昌
わすれその命いかなるとあはせても 玄周
たりきらうへもこのまゝ世の 言継
ちる花をや数るゝゆをはゝむ 宗牧

よねこの行末をあてゝこそくらし　貞和
人待とこそは思ひはつまれ　行恵
夢の唐の西の山よ中　宗碩
ともし火はつとむる色も猶まさて　貞治
くけるとの井のきこくかゝる峯さき　宗牧
恵ちとや日初き園まて作らん　信何
かくきしもやいらくてかくへき　玄周
いともそて影は有るこのまんつみ　宗牧

うゐて思ひ今は命しき　貞和
ちゝめるを契りし我もうつけく　氏弘
まつこゝろといへる雲気わり　行恵
かゝくてふのもの深きもまつなき　宗梅
古ゝ袖あそ知む千代の行末　高晴

天文十三年十月十五日

宗牧 十三
氏弘 七
貞和 六
為雨 四
言好 九
貞治 七
賢昌 三
貞信 三
行意 六
経阿 八
説芝 六

玄周 七
承紀 四
宗梅 八
為経 五
賢繼 一
賢運 一

右一巻杉山某之秘蔵藤敷宮
仍而遂挙令書写者也
文化五年閏六月　藤當幹

天保十三年夏六月書写之
久文

内田玄勝家所蔵中書

四方に花見るも一木は御所　誂巴
あらしの嵐出錦莫の里山　玄以
暮れ夜の月乃小車ひき出八之て　敦通
神長閑なる道の行末　輝資
鴬の餅あるらしい通てき野小路
竹の葉あかかる雪まさて　承孝

さし移る日の影はさやかにて　雅継
雲きりしとの水のみなかみ　英怙
河波に吹みだれつゝも風の音　由己
いつるとなしも船かへるなり　玄仍
雨そゝく　やまの梢に鶯なくらし　素思
屋とりにいそく鳥のこゑ〳〵　友益
野をとかくる森の木陰は遠からて　桃箏
神の祭にまゐる里人　巴

ゆくかなる時もやうし道なりし　以
今も絶せぬ大和言の葉　通
去秋のうつる氣のあはれにして　資
いつまて須磨のうらにあれん秋　此
ありくの鐘覚ときさへ床によする　孝
時雨し程の月はすそちか里　継
山風のつよみ竹のこのまをあらそ　怙
かりくも糸木の葉ちらそよ　己

露の音は雫もとまる霧晴て　仍
岩根つたひの道はさかしし　恩
川橋やくちて波の越ゆらん　益
いつしかも荒て古寺　以
心せぬかは世をも立かくり　巴
おしのこみいつか悲しき　資
野焼の跡さくまれの中つく　通
をちかたへ人はゆく思志らまぬ　怗

吹とめぬ風の道の梅も絶　叱
匂ひをもらぬを深山の　孝
花のかをも末雲松山くれ渡り　継
月もよしより衣うつかと　巴
分迷ふ野への如くきれ秋寒くて　以

紹巴
玄以　前田徳善院法印
敦通　久我権大納言
輝資　日野権大納言
昌叱　里村昌休子
永孝　高倉権中納言

雅縁　飛鳥井権大納言　段雅庸　英怙
由己　和漢才人にて東陽子及ひ豊臣閣　若君
　　　居屋法ちかと貞徳栽恩記子あり
玄仍　紹巴子　寿恩　内田玄伸祖
友益　速水氏　栽恩記　執筆
これは紹巴玄仍恵草の一帖給ひて
年おほ遠さ尤貴世の証ともなるへし
文化十年二月二日書写　司直
天保十三年夏六月三日書写し　久文

寛文十一年十二月十七日
法皇御所御會
霜枝さく玉しく芝の砌かな　後
池水ひろくそうつ鴨　豊
氷の帯岩の緑白く瀧　瀧之所ゟ弥宰相
緑は色くる山はのと帯し　良仁
桜さく峯よ月ともなりて　晃
影のこれぬ旅の泊ち端　資

逢ふ人も皆まるめ行道の末　文
里より汐をくみて雪もぬらす　種
川岸みおせくる船を継檝(ツナギ)　豊
刈ほしてやはてみ芦原　修
陣林ほそ錦士ら笹茨葺(フキ)ひ侘
夜ごと衣打こゑ静　良仁
月も尽く曉ちかく影更て　資
たて一声をまつ霧秋風　文

○

隠まなくも神の恵(コヽロ)を軽しみたに　晃
かあしきてみれ穀まさる中
錦木もあす根の種見えて　修
えつゝやえん秋浪川　豊
なの世れ隠とめ慈(ラコス)るれゐつくに　資
老ハみけおき霊個の鮭
思ひもちも玉を鮮弱あくらく　良仁
わすくまくえてね古さかれ志　晃

陽炎し霞もいく旅の空　芰
浦浪きえて有る沖津船　茂
せつつやいふ心をはくし潟　晃
うての法ひや結ふ国はらを　俊
兎子おもしろゆるを雪みの友すまし
ちりうせあやふ干しれもの道　貢
松の門きぬうつ音も頼もしく　良仁
かけつてのまゝ居し朽る丸木橋

淀川のむらひま深し初丹葉　芸
霧時雨ゆく宇治の山陰　俊
澄よる月も木幡の関　こゝろゝく　旅宿きを枝
枕ゆくへの中とりゆる　神　良仁
ほそまきくなしのくあまりこのめも衣
去まて宗花雪の御狩場　武鶴
焚跡て煙もなびく薄霞　芸
野きらい若もあき紀若草　俊

雲雀立沼辺の風のつよき明ほの　是
行山をまた行方こあらく
わら屋にいりてしらぬのきばかん　賀
おりかひすゝ住なる月　良仁
海あらくき秋あれまもいらぬ　蔵
例ならぬ腕かれ歌いはて　是
○
根あまや見まわり花の夏木立
またたびらく伴ほらきまで　良仁

○
曙のそれ称ある村雨は　是
雲の称ある村雨村まかせていふことなく
ちらくあゆしきき月の四ツの跡
すき間きき影のゆるれ又嵐　良仁
曙かくとるは又雨の月とあわせし
妹恋しらに霧立ちる袖　是
恋のぬるゝ袖のしほる打帰て
うききをとするにつむ才れ思ひ草　倭
結真てに
伴くうまあゝちきり何こともと　蔵
たのむつきわとしもすて二首過ぎて

牡もてかへる玉章　　良仁
のつきても尽し世の友と恩も子　　昆
枕の夢をさます松風　　貸
いつくとも波の磯辺の泊舟　　良仁
墨もいつ鳴も侍らぬ夕かな　　芦
あひきもきらぬ世男此あまも豆崎の
笛やまちつくさよ萩の紅葉　　俊
秋の日がお里子庭の群絶て
居所ちかくお里ハ半ハ不作

○露深き月の明ぬる　　昆
侍ハ身をさひあかつ部屋の　　芝
夜もを庭さてふもすつらきをりをき　　茂
あひみきハわりしすも似ぬ心まよ　　良仁
中つき姿ハあはれ人妻　　俊
○こけるからと成ていつ花比あす　　昆
何しいつの清芳生の梅
うくひすや古巣の山はかへるらん　　芦

みれ野辺の夕ちらしき　晃
行かよふ袂も見えぬ五月雨る　箴
岩こゆる音のすゝき川そへ　資
水すさきやふ瀬を鮎やわたらし　條
柳の一葉さそふあき風　茨
ときめかす家西の霧に秋立て　跡書し
せうく体らぬ月の細發　跡書し

おゆくもはまさひぬる俳歌　跡書　豊
松りに立田芸山路ゆく種　跡書し
深ゆ帯し鹿いとあかき河円母に　條
いとちさきあと深のとんの店と一た
深の字せんあき続ゆ店
出くて額る田舎ミたゝく　晃
下りに此世のいとあかき気志ま
霧おしけまもあくる殿人　良仁
たく葉跡さる店し

梅さきて咲野花を折くへ　芦
おの業人の帰るやうに呼ぶ
松そさくらさくちもし夜山　復
引こもる谷の下庵頼ともむ　良仁
下と下折嘘
〇
住ひあかぬ衣かくの月　蔵
はつまの時露をかゝく衣手に　貴
うつろちくさに色ハぬ秋　交
萩の花志らき尾花に埋れて　晃

萩見ぬ世にも草に萩落も
乳保あしくれ
かよひしうちも見ぬ古郷
通ふ見の字も出ひくおとは居
ゆりさく志って出しき塚のあと　晃
名り
うき貌さすむ塔の草村　豊
山錦の垣まつゝくみちくさ
扨みふ成あやれもとめぬ　蔵
清らくのる心を法の織ふく　晃
此ほき枝

行ひさしの室の戸ちらちら　良仁
時ゝを告る鐘の声さひし　俊
あくるまゝ久し弘資まつ床
○ 光れ雨に壁ちろく花の比　資
音もさへつる竹の春風　豊

点十九内長四　里村祖母奉

法橋玄俊十四句　点五　長一
日野大納言弘資　九　長一
正親町大納言実豊　十一　点二
風早宰相実種　一句
中院大納言通茂　七　点一
法皇御製　廿句　点四
新院良仁御製　十四句　点一
照高院宮道晃　十七句　点四　長一
八条宮式部卿　一句

従　法皇廿二ヶ条祖白
此為　作下旨

一霧さく
此発句霧の玉しく心形　宗なく
るやも猶ぞすも様殺ありさる事調に
極り續くと互円も明るまてなきや
但仕立以下不足の所あやしく

一池水

是の柳の寄合題成る是の所也

一朝句
此句ゑ題ゆへ不足と所也

一頼恵ね
此ころ又いふゆしてまりや　但此形と
留りきし不足なり

一羽衣しく
させるとも無くゆへふく形をなる前

ぬ何

一只一言の

此句秋風の時分に一言無一つまり
心ゟ尋ね候此の法もちくるゟし
き歌ゟ候はぬ事に候

一 錦木を

前句の躰まさると云ふを錦木にて云
成りし心ゟ留めしを種々をいふと云ふ所
躰まさるところにうつる恨の所とてくる
やうに申すく付申す上記申すにいひて

一 後の世

おろかさの所又いふ事に候ちんや

一 老ハ無似気

此句不足の所也

一 所不あもね

初学の心のうちて此使もん次引そいか
種子種子記種子ハいつまし起り

一 如何なる所にし

付心不足せうまうる不足の所にて

一 露時雨　月

一 濃の所

守治みてゝ見えける月の中にみるる本情ハ

宇治より山西に当れば宇治にては木幡の
関越る月見らるゝ由なれば此の方角
の用心のうちまゝ事に此法を定る也

一 枕ゆふく
此句なとも句作以下に細か紀せすして不足ぬ句

一 千首新く日

一 芸楽くく
此句ハ穏なきやうにいて

一 思ふ甲斐なく
此句ハ物語の心に熟中のうちぬ句

一 まつ紀かうく
是も不足と所ぬ句

一 調あやしき
月の夜と読て心こそ醒て空の誌
不似合にいて

一 狩捨かうく
物語の心に不申すやいて

一 逢ても
此句一段至極して不足の様にいて

一 枕の夢
捨る路ありにいて

一 墨まハ鴫も
此句ハ只ゝ句の心ニしぬ此例諸余多
去こと乎読をおも付也しハ不足の不め可

一 谷の庵に
伊勢の濱荻斗ニて付心さしさる事也
根ホぬ可

一 侍也
宜しき也こ不替ひ不ハ

一 我身さらん日

一 逢ぬ也ハ

一 同しいつの
初通ての恋の心ナる是又宜様ニ替ひ所ハ
是又替ひ不め可

一 打中しくも
句作り新心所也しさらぬや

一 下り下
是又不足の不め可

一 山鄰 右同

一 住へめる
句作り心しそ仕つる法のまゝあれ

依　勅奉答一　　　里村祖白上

一霜さく
此発句作例ニ色葉の玉しく跡し　宗祇居
士存知の比様校ニ付きもて当句当存分候へ共猶不
審存候

一池水凍と
是御の式会不存候へとも他可致存候尋鴨ニ
いつて有の風雅によそもなき事にて候事存候

一朝白見つる
水邊より白め致様ニてさ宗祇居へしつかひて候句
ニ存候山分ハ答ニ不儀ひつへいつ

一散志もの
旅の此は当は前後より御様子申候

一別ちて
むかしさきさもむかの歌ニは尤おもひ会申候事候

一只一言を
此付句作者の下句の中ニ宗の外に秋風の後を
たくの中ニ人可宗考中ニて見只答作例うつくしく
御むかしも候

一錦木も
錦まきる程見しく前後申しよろしき事ニ可申しむ
左様ニも見候へ共錦まきる八錦木ニて此何ニ[illegible]
る八字來の源ニあつて村中く而て根のつくへうろ申し二

ゆゑにやとも嫌ふ事なく(て)嫌ふなるに懸え候よしも
打越とて要にや候はゞ嫌ふべし

一 後の世の
おろかなると嵐前後まで中に嫌ふべき也

一 老は無似気
後の世を去るぬとなり

一 男子おとこ
うての使も次に越て遠ざかるべからず也
又嫌ふ事なし

一 かたつまふし
其類は句去て

一 露時雨 同

一 澄上る
木幡の山は晴て月はあかゝりし御関城郭
待る人は此方より行て宇治の方をも見渡しける
也宇治へ行とも宇治に当りて見えくは宇治のへ
木幡とも見ゆる也それは無用候はゞ連歌の方を
方角無用遠ざかり用心仕る也候は一ならず
ゆく也

一 枕也

其類は句去て可嫌也又嫌ふ也無用候

一 千両たく
其類は句去て可遠嫌也

一 芸楽焼 右同

一 思ふ甲斐なし
　御詫の心にて御申し宜敷句にて

一 海たきかへりく
　色も地連続にて御座候

一 調あやしき
　月の夜と讀申し候處 月の田鎧も
　つまり申し様て様 暖の色まゝ似合不申様に
　まゝ候

一 打捨つる
　御詫の心に無申し

一 通ひても
　宜敷句に御座候へ共 逢世者の方より送りし
　を何とか申し玉章を御申し候事まゝ候

一 枕の夢
　此句を出させ候所 出来兼候申し まゝ候へ共ひとつ
　手前にて書きつく 付申候如申しのてはあると
　仕候連歌一躰にて御座候

一 暑れは
　何ともなく御申しに申候申し 無難なる句にて

一 花屋
　出させ候ても 出来兼候へば 作勢の演枝を

なく海士の苫屋へ立帰り打つ花の名所
能きをとて有申し事候

一 侍ハ
道は句にて一所面の大事にて候

一 夜もと陽ん
さもなくては句つゝくの座候

一 遠見もの
右同

一 同しハ
兄も地も前つゝくる

一 打中しくと

此句仮初心の時ニて□□座ニて申し候

一 下々下
付心初心の時ニて申候

一 山端の
山と云字より申事ニて申候

一 仕へめる
心こそ仕の法の花あれ此句つゝきて

一入句ニ候ニ書候

右点者会紙言一句宛ニ書積小書

ニ而上作ル下者如常様紙四枚也

成嶋司直之蔵書借写

右古建部一冊溝口縫殿史より借写

天保十三壬寅年六月十八日

久文